

永久平和

石原莞爾自筆

第145号
(平成30年7月25日)

目次

巻頭言 二人の建国者 神武天皇と石原莞爾	1
◆全東亜の名を以て御礼申し上げ候 池本喜三夫と石原莞爾	2
●会報誌の発行を続ける理由	4
●波動	5
●総会報告 会員便り SNS コラム	6
坂本進一郎	8

宣言 (昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

二人の建国者 神武天皇と石原莞爾

当会会員 作家 早瀬 利之



今でも思い出せない記事のひとつに、田中久大佐の発言がある。多分にこの機関誌の中で会員の誰かに話したことだと思う。

田中久大佐は昭和十三年春まで関東軍にいて満州国軍の顧問だった。当時、満州国経営をめぐる、東條英機参謀長と意見衝突し、軍をやめて四国高松の郷里に帰り、民間人となって東亜連盟の高松支部長として四国四県を束ねていた。戦後、若い会員から「石原將軍はどういう位置付けになるか」を問われた時、田中久大佐は「そりゃ神武天皇以来の人物だよ」と断言した、との記事が何処かに載っていた。以来両者を分析、比較してようやく今日の結論に達した次第である。

「日本書紀」に依ると、伊波礼毘古命（いわればこのみこと・のちの神武天皇）は大和を平定するため兄の五瀬命（いつせのみこと）と九州日向をたち、途中多くの氏族を従えて現在の小倉辺りで一年、安芸で七年、吉備の高島宮（岡山）で八年をすごし、瀬戸内海を大阪に、淀川を上ぼって枚方に上陸して南の大和に入ろうとした。ところが大和軍の迎撃に遭い、兄の五瀬命が傷つき、作戦を南の紀州半島南回りに変更、熊野から上陸した。途中多くの国津神々と交戦し、荒ぶる神々を平らげ、橿原（かしはら）で天下を治め、大和を平定して大和国家をつくり上げた物語りである。のちに紀元前六六〇年二月十一日を建国の日と定めた。

満州国の建国も奉天城攻撃をきっかけに、荒ぶる満州を平定し、昭和七年三月一日、石原中佐は五族協和の満州国を建国した。新しい国を

作ったのは確かに神武天皇と石原莞爾將軍の二人である。源頼朝、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、そして明治維新の西郷隆盛がいるが、いずれも「国のかたち」を作りがえした事例で建国ではない。建国という意味では、確かに田中久大佐の断言どおり、石原莞爾將軍は紀元前六六〇年の神武天皇（初代天皇）以来の人物と評価したい。曲がりなりにも十三年間、アメリカ合衆国同様、異民族の協和のもとに、満州国は存在した。残念ながら石原理念とは大きく外れたその後の無能な軍人や、政治家に依り、植民地化されて形だけの満州国家に終ったことは残念である。

さらに海軍の南方進出で日米が対決し、ついにはおろかな東條内閣で太平洋戦に突入、敗戦で満州も台湾も千島列島も失ったのは、無念の限りである。会員の皆さん、何でもいい、石原莞爾について研究、発表されよ。必ず何かがあるはずだ。期待しています。

プロフィール

昭和十五年十二月長崎県生れ。三十八年鹿児島大学卒業。上京して雑誌のライター記者。昭和五十五年雑誌編集長を経て作家活動に。「三田文学」に小説を発表。芥川賞にノミネートされるが、同人誌「青い花」廃刊と共に純文学を断念。以後「週刊文春」で記者をしながら石原莞爾、松井石根の研究にとり組む。作品に「石原莞爾・北支の戦い」「陸軍参謀作戦部長」「満州合衆国」「石原莞爾と二・二六事件」（いずれも光人社刊）、「マッカーサーが一番恐れた日本人」（双葉文庫）、NHK朝ドラ「マッサン」「リタの鐘が鳴る」（朝日新聞）のモデル「気の剣」などがある。関東戸山流居合剣道会会長、日本ペンクラブ会員。

コ◆ラ◆ム

ワールドカップで、イタリアが60年ぶりに予選で敗退しました。番狂わせが多い中、初戦コロンビアの視聴率は今年最高の48.7%でした。凄い。アジアの歴史的な勝利、世界が日本を絶賛している一方、ワールドカップのテーマ曲が盛り上がりならず、選んだNHKが悪いと批判が出ていました。

結果、日本は決勝トーナメント・ベルギー戦で負けてしまいました。この負けた遠因はポランド戦にあると私は感じました。ポランド戦における、最後の8分間のパス回しの決断については世界中で賛否両論が沸き起こりました。あの時、決勝進出を賭けた勇氣は、称賛に値すると私は思っています。

ポランド戦についてのブーイングがベルギー戦の後半2点リードしているのに全力で攻めなくてはいけなくなってしまうのだと思います。ここでパス回ししていたら負けなかったのではないかと結果論だが思ってしまうしました。また、怒られるでしょうが(笑)

1992年の夏の甲子園で明德義塾対星稜戦、明德義塾が星稜の4番打者である松井秀喜を5打席連続して敬遠する作戦をとった、この試合で松井が一度もバットを振る事がないまま星稜が敗退した出来事を思い出します。この時の明德義塾の監督への批判は、西野監督への批

判に似ているように思えます。

今回、最後までゴールを狙った場合、結果はどうなっていたのか分かりません。失敗となれば、全国から批判を浴びたことでしょう。歴史は勝者の歴史ですから、敗者は概して悪人とされ、勝者は善人とされるのは世の常です。同じような経験が過去にあります。

1998年のワールドカップ・フランス大会。三浦カズが落選したことにより、城がエースとなりました。しかし、何度もシュートのチャンスを逃して結果は無得点で3戦全敗だった。この責任は城にのしかかり、帰国した成田空港ではファンに水をかけられた。

この時の城の母親のコメントは「日本人全員の代表でフランスへ行ったのだから、結果を出せないのなら水をかけられて当然です」と言うような事を言ったのを覚えています。その時、なんて強い母親だろうと感動しました。日の丸にはものすごい重圧がかけているのでしょうか。

決定的な好機を外した柳沢へのバッシングもまた凄い。すべては柳沢のせいで負けたかのような責め方です。さらに、柳沢を続けて出場させるジーコへも不満も爆発しています。責任転嫁は延々と続くでしょうが、チームスポーツは誰が悪いとかじゃなくて、結局は、そのチーム全体としての力がないから負けてしまうのだと思うのです。

数年前の無得点で3戦全敗だったワールド

カップ・フランス大会では、日本人サポーターがスタジアムのゴミを拾って綺麗にして帰りました。自国が負ければ荒れ狂うサポーターに慣れている西欧のマスコミは驚いたそうです。普段は部屋の掃除すら出来ないであろう日本人が、海外で自主的にスタジアムのゴミを拾うという、素晴らしい行動でした。

こうした若い世代が何時の間にか育つていたのです。それに比べ歩き煙草をして平気でボイステをするモラルが欠けている人間は最低です。今年も世界に映像で配信された日本人の行動は誇りに思います。サッカーで世界の頂点を極めることより、人間的な誇りこれこそ我々が出会う価値で、至上的なものではないのでしょうか。(仲條拓)

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上
一般会員5000円、誌友会員4000円

第145号 平成30年(2018年)7月25日発行